

1、はじめに

懐かしくて何度も思い出してしまう昔のこと、自分の心にだけしまっておくのがもどかしい思い出、人は誰もそういう記憶を持っている。ある日思い立って記憶をたどりながら日記のようなものを書いてみる。そういう人も少なくないと思う。

こうした個人の思い出や手記は親族にとっては愛する家族の人生の一部として大切に所蔵され、それゆえに一世間に知られることなく一場合によっては行方が分からなくなること多い。しかし、そのたった一人の記憶が長い時を経て「歴史の記録」となることがある。

私の手元に小さな冊子がある。表紙には「私の思い出 大正町大奈路 小野川利國」とある。この「小野川利國氏の手記（以下「利國氏の手記」という）」はまさにそういうものである。

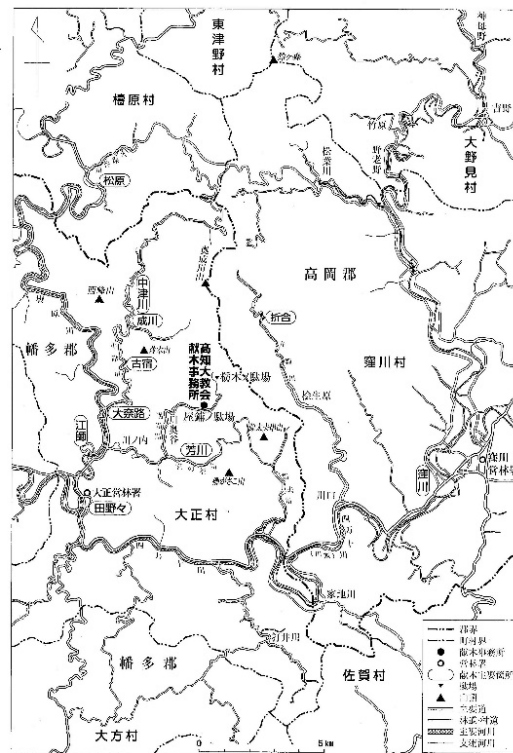
今の大正地域の方々にこの「利國氏の手記」を読んでいただくと、そこに記された人名に「これはだれそれのおじいさんだ！ひいおじいさんだ！」という話が盛り上がる。「利國氏の手記」は、今はまだ人の体温が残る記録なのである。

とはいえ、手記に書かれていることや少なくともその空気感を知っているのはおそらく昭和30年生まれの私たち世代がぎりぎりではないかとも思う。本稿ではこの貴重な記録を次世代に、特に若い方々に手渡せるような紹介ができればと考えている。

2、「利國氏の手記」その背景と保存の経緯

少し回り道のように感じられるかもしれないが、「利國氏の手記」は資料としては本稿が初出になると思うので、書かれた背景とここまで大切に記録保存されてきたいきさつを述べておきたい。

「天理教への献木」と旧大正町の人々 奈良県天理市にある天理教本部には全国の信者が敬虔な祈りを捧げる東西南北の四ヵ所の礼拝場が中央の神殿を取り囲むように連結して建っている（図1）。その中の南礼拝場の546畳敷の大広間に神々しいまでの巨木の磨き柱が



大正、霊川岡菅林署の管内地図

地図1 大正村芳川周辺の地図

(天理教高知大教会史から転載)

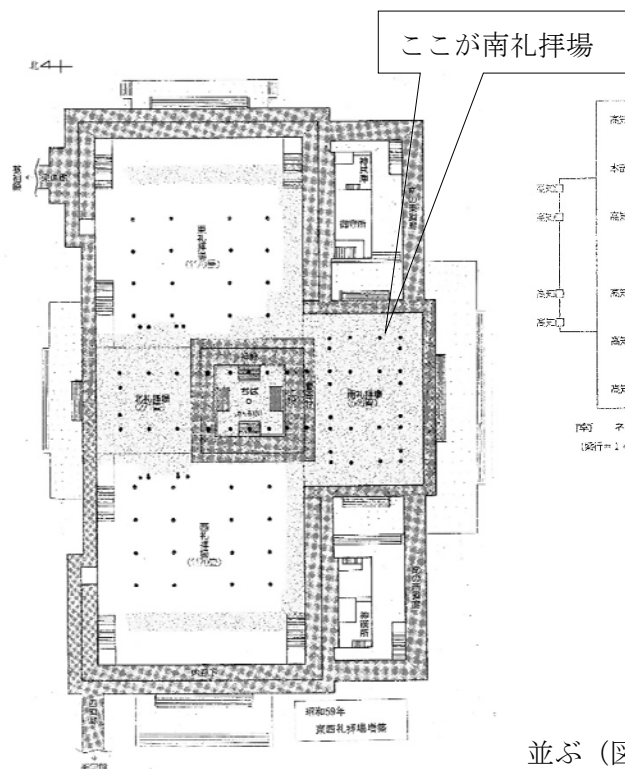


図 1

天理教本部 東西南北の礼拝場位置図
(天理教高知大教会提供)

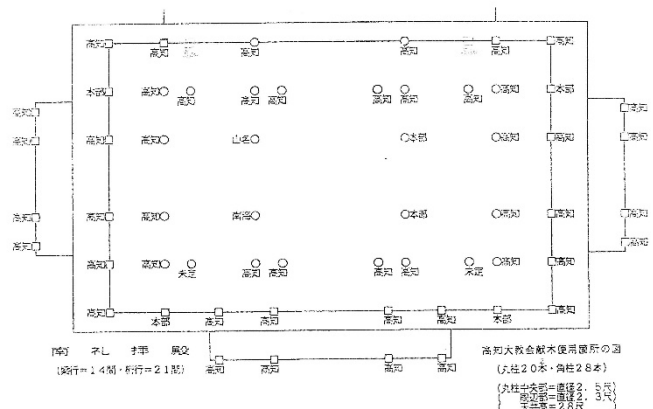


図 2

天理教本部南礼拝場の高知献木の使用位置
(天理教高知大教会提供)

並ぶ(図2)。この柱に高知県が深く関わっていることを知っている人は少ないのではないだろうか。

昭和5年(1930)に決定された天理教本部神殿の「昭和普請」¹⁾は信徒からの「献木」によって

実現された。この「献木」は二つの意味において高知県の歴史の中の大事業といつてよい。ひとつには高知大教会の命懸真剣の思いの下、経済的な面も含めて信者の信仰と熱意によって成し遂げた大事業であったという意味において。いまひとつは、伐採も搬出も困難を極める深山(深いからこそ求められる巨木があったともいえる)での杣人たちの技と知恵をしぼった成果であるという意味において。

筆者は20年ほど前から四万十町大正中津川集落に出入りさせていただいて、何度か「昭和の献木」という言葉を聞いていた。大正中津川森が内の大規模林家であり地域の森林管理を担っている林幸一さんは昭和初期に天理教本部増改築にあたって我が地域の木材が大事業に貢献したことを熱く語った。それほどの巨木を擁した山があったということ。当時の先人たちの苦労があったということ。巨木は今も拝殿で神々しく立ち並んでいるということ。現代の杣人は90年前のふるさとの森への思いを募らせていた。

「利國氏の手記」との出会い 「昭和の献木」はいつのまにか私の心にも住み着くようになり、「調べてみたいです!」と林幸一さんに申し出たのが令和3年(2021)の初春。いくつかのやり取りがあって令和3年11月21日に天理教高知大教会史料部の岡本雄三氏との面談が実現した。はからずもその時の天理教の会報誌「天理時報」最新号(2021年11月17日付)の一面の特集が「高知の献木」であったことは縁以上のものを感じさせる。その後、天

理教高知大教会長島村正規氏にも面会がかない、ご厚意によりたくさんの情報と資料²⁾をいただいた。ここに深く感謝を申し上げる。

初めての面談の際、岡本氏が大切なものを扱う仕草で小さな冊子を差し出された。それが「利國氏の手記」である。A 5 サイズ 21 頁、岡本氏によって丁寧に書き起こされ補足もされた手記は思いがけない宝物であった。というのも、これまで大正町にあった「献木」に関する文書情報は『大正町誌』³⁾のみであったからだ。「利國氏の手記」は「献木」伐採の現地の様子とともに昭和初期の大正の山村のくらしがつつられている貴重な史料であった。

3、天理教高知大教会の「献木」記録保存の取り組み

「献木」当時の記録 「利國氏の手記」が書き起こされ残された経緯は天理教高知大教会による「献木」の記録保存の取り組み抜きに語ることはできない。「献木」当時はもちろん綿密な記録が行われた。文書によるものだけでも二代真柱中山正善氏⁴⁾の芳川山検木に随行した方の記録をはじめ、有光権治氏の記録、契約や運搬にかかる文書等様々な記録が残されている。

記録中でも特筆すべきは 16mm フィルムの映像である。動画を記録しようというのは当時の高知大教会二代会長島村國治郎氏の英断によるもので、撮影は芳川山伐採起工式から始められている。動画撮影が簡便になり記録の主体を占めるようになった現代ならばいざ知らず、全国にも希少だった 16mm 撮影機を用いての記録とさらにそれを活用して広報に用いようというのは、当時はなかなか考えつかないことである。これはカメラ撮影への造詣の深かった二代会長ならではの時代を先取りした発想であった。

大阪の会社（浅沼写真機店）から派遣された撮影技師は急な斜面、足場のよくない山道をものともせず撮影を行った。撮影機の動力源は現在のような乾電池やバッテリーではない。したがって長時間は持たない。撮影機の動作が止まるとネジを巻き直す。そういう撮影風景であったという。

その 16mm フィルムは天理教高知大教会の指示にもとづき全 15 巻の「献木映画」として編集された。献木映画の上映総時間は 3 時間以上になる。「献木映画」は全国各地の教会で弁士つきで上映⁵⁾され献木への意識高揚に貢献した。献木映画 16 mm フィルム 15 巻はその後いったんデジタル化（媒体は「DVC PRO」カセットテープ）されたがさすがに時間的な劣化が懸念される状態にある。旧大正町の方々が見たいと願う 90 年前のふるさとの姿、林業の現場がそこにある。再び見られる時がくることを願ってやまない。

映像記録はこの他に天理教高知大教会四代会長島村廣義氏の命により作成された「献木ビデオ 昭和普請」⁶⁾がある。これは「献木映画」を元に作成されたもので高知大教会の内部資料である。なお現地関連の当時の資料として、現地従事者の中の 100 人余の名簿が高知大教会史料部に保存されており、これは近々四万十町（旧大正町）へ当時の協力への感謝を込めて提供される意向と聞く。

平成の現地調査 天理教高知大教会では「献木」当時の現場の位置確認と情報収集のため、

平成 12～13 年に史料部による旧大正町の現地調査を行った。この時の調査者は元高知大教会史料部長西伊勢夫氏で、ご子息の岡本雄三氏（現高知大教会史料部）と当時学生であった現会長（五代会長島村正規氏）が同行した。調査は「栃木ノ駄馬」「芳川山献木事務所」等の確認に芳川山の深くにも足を運んだ。現地の案内は武政健男氏と林幸一氏であった。

本調査終了後も、岡本雄三氏は何度か現地に足を運び補足調査を行った。その際、献木当時に現場で働いていた小野川利國氏が大奈路でご健在であるという情報がもたらされ、利國氏から直接貴重な体験談を聞くことができた。昭和 5 年（1930）に 13 歳ということから計算するとこの時は利國氏 81、2 歳。聞き取りは自宅ではなく「大奈路の町内の川にかかった橋のたもとの小さな飲食店⁷⁾」で行った。聞き取るうちに「自分（利國氏）で書いたものがある」といって自宅から手書きの草稿を持ってきてくださった。その草稿を岡本雄三氏が書き起こされたものが「利國氏の手記」である。なお原本は書き起こし後に利國氏に返却されており、実物は現在（2022 年 1 月 12 日）のところ確認できていない。

これら平成の調査結果は、献木当時の記録（文書記録、16mm フィルム、写真等）と併せて「天理教高知大教会史第三巻（平成 28 年刊行）」に「昭和普請の献木」の詳細な記録として集大成された。ここに「利國氏の手記」もインタビューとともに引用されている。

4、大正地域の「献木」伐採の概要

『天理教高知大教会史 第三巻』⁸⁾（以下『高知大教会史』という。）から大正町現地での「献木」伐採搬出作業の全容を年表で確認したい。天理教高知大教会の「献木」の伐採・搬出は、昭和 6 年（1931）から 8 年にかけて高知県（魚梁瀬、旧大正町、旧窪川町、旧西土佐村藤の川）および長野県南木曾で行われた。その総量⁹⁾ 905 本 9,316 石余（2,591 m³）で昭和普請全体の 5 分の 1 という規模である。

当時は世界大恐慌の波及による「昭和恐慌」の真ただ中で経済的にも困難を極めた時期であった。『高知大教会史』には高知大教会、信徒の方々、献木の伐採現地での幾多の苦難が記されている。

『高知大教会史』から大正町関連のみを抜粋し時系列に整理したのが文末の表 1 である。

高知大教会史では旧大正の現場の記録記述にかなりのページが割かれている。それは他の献木伐採現場では、営林署との契約後は営林署の手配で材が入手できたのに対して、作業道も搬出軌道も整備されていない芳川山で巨木を人力のみで伐採搬出するという例のない作業をすることの困難がいかに大きかったか、ということである。

そして小野川利國氏が手記にいきいきと描く「山仕事」は、まさにこの「芳川山」現地の出来事なのである。

5、「利國氏の手記」に見る当時の山村のくらしと献木伐採

「利國氏の手記」は当時 13 歳だった小野川利國氏がのちに当時を振り返って記録したものである。「献木」伐採搬出に従事した思い出の「私の思い出」と当時の生活を振り返った

「家族のこと」の二部構成¹⁰⁾となっている。

当時の映像（『高知大教会史』の「昭和6年12月5日朝 二代真柱様芳川山検木登山記念の集合写真」）に利國氏が写っている。大人たちのなか、ひととき小さな少年の姿である。これを思い浮かべながら手記を読むと一層感動は深くなる。そして、読み進むほどに今の私たちの生活に何かを問いかけてくる。



当時の小野川利國少年

その「利國氏の手記」を（1）昭和5年 山村の少年の日々（2）献木伐採の現地の様子の2つの視点から見ていこうと思う。なお文中の「」内は特に記載のない限り「利國氏の手記」（岡本雄三氏書き起こし）からの引用である。また画像は高知大教会史料部より提供いただいたものである。



芳川山伐採起工式（昭和6年9月27日）
左から二人目が利國少年、手前が小野川精馬氏



芳川山伐採起工式（昭和6年9月27日）
左から二人目、長椅子に座り後ろを振り返っている少年が利國少年

（1）昭和5年 山村の少年の日々

ここでは利國氏ではなく、利國さんまたは利國少年と呼びたい。そう呼びたくなるような少年の日々だからである。

昭和5年3月27日、利國さんは大正村大奈路尋常小学校を卒業した。「十三歳でした」と手記にはある。当時の尋常小学校の卒業は通常は12歳であるからおそらく数え年であろう。

利國さんはすぐに仕事探しを始める。「高等小学校に進学した人は一名。当時の子供は、小学校を卒業したら子守さんに行くか、男子は山仕事に行くか、各家々が現金収入がないので、一銭でも働いてお金を取って家計を助ける仕事をせねばならなかった」のである。

利國少年の家族は母と兄、養女、利國さんの4人家族。明治20年8月20日生まれの母は利國さんの小学校卒業当時は満年齢だと42歳。「母は毎日、営林署土場の倉庫の木炭整理の仕事に行っていました。一日の賃金は七十五銭くらいだった」。当時の人夫の一日の賃金は一円ほど。その仕事のほとんどは力仕事である。想像ではあるが女性の体力のできる労働の賃金は低めだったかもしれない。女手一つで支える家計は現代でも苦しい。利國さんが仕事



地図2 「小野川利國氏の手記」関連地図

探しを始めるとほぼ同時期に利國さんの兄も遠く幡多中村（現在の四万十市中村）に働きに出ていった。

「昔の山村は現金収入が無かった」という言葉は今でもよく聞く。「利國氏の手記」が今の私たちの社会や生活に問いかけてくるものはたくさんあるが、この「現金収入がない」という一言もそうである。近年地方の集落などで地域振興を学ぼうとする若者が増えてきているといわれるが、彼らにはぜひ一度この言葉をじっくり考えてみて欲しい。現金を得ようとしたら、単純に言う商品と商品を売るか、労働して賃金を得るかである。地域おこしの特産品づくりとか都会からの消費行動を呼び込む農村観光などというものはごく最近の発想と言ってよい。

ともかく 90 年前、製造業などもなく、耕地面積も小さく、消費地には遠い山村ー旧大正町では山から切り出した材を売り現金収入を得、その作業に従事したものが賃金を得る、つまり「男子は山仕事に行く」。それが利國少年にとって一番身近な仕事であったことには間違いない。そんな利國さんに集落の大人が声をかけてくれる。「利國、茶沸かしの仕事に行け」と誘ってくれたのは、「大奈路の地元の山仕事の名人がたくさんいるうちでも名人という先遣りの人」小野川精馬氏¹¹⁾である。こうして「天理教献木」伐採搬出の現場が利國少年の初仕事となった。

初めての仕事ー献木現地事務所と人夫小屋の建築 天理教高知大教会はまず現地事務所の建設に着手した。芳川の川奥の民家を借りて¹²⁾ 屋鋪ノ駄場（やしきのだば）に「事務所と人夫小屋」を建てるのである。

当時は大奈路から芳川部落へ行くのには歩いていく道しかなかった。利國さん達も「竹ノ谷」へ入って「せこノ尾根」を自分の荷物は全部背中に背負って山越えした。利國さんの記憶では建て始めてから「十日足らずで人夫小屋ができあがった」という。

天理教高知大教会の記録では事務所と作業小屋は昭和6年9月下旬に完成し、伐採起工式が9月27日（伐採式は9月28日）に執り行われた。本稿に掲載した大人の間を動き回っている小さな利國さんの姿はこの時撮影されたものである。削ぎ葺き屋根の事務所で、その裏側に人夫小屋があった。人夫さんひとりひとりの部屋の広さは畳一畳分であり、寝るのも食事をするのもすべてその場所」であったという。

「献木」伐採搬出現場での利國さんの一日 利國さんの仕事「茶沸かし」、それはまだ力のない子どもが山仕事の現場でなんとかできる仕事だった。

利國さんの一日はこのようなものであった。

【朝】 毎朝五時に起き、まず大きな石油缶でお茶を沸かし、炊事婦（かしき）さんがご飯を作る。作業事務所の配置図でいうと人夫小屋に隣接した「釜屋」が煮炊きの場所であったろう。ご飯とお茶を人夫さん一人一人の居室（寝床）に配る。それを人夫さんが食べ終わるころに山の現場で食べる弁当二食分をまた配る。その間に利國さん自身もあわただしく朝食をすませる。

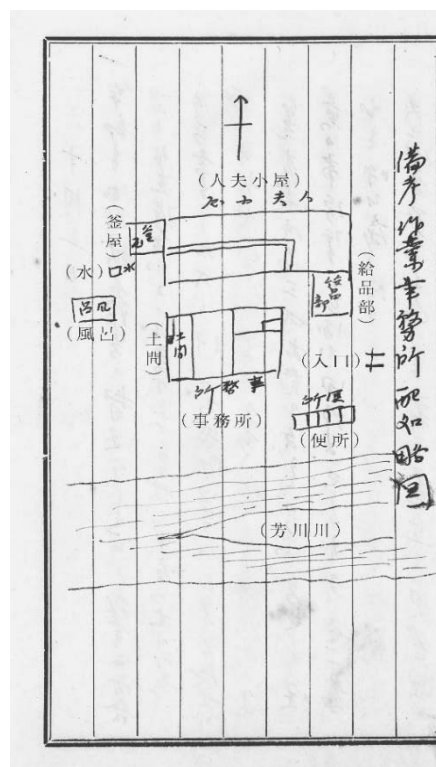
【昼】 食事が住んだら大人たちと一緒に現場へ行く。現場では一回目（午前十時）と二回目（午後二時）の弁当による食事の時の茶沸かしが仕事だった。そのうちに茶沸かしだけでなく簡単な手伝いもするようになっていく。

二回目の（二時の）弁当による食事が済んだら空になった弁当箱（三十人～三十五人分だったという）を集めて棒に差して、前と後ろに振り分けに肩に担いで小屋まで持ち帰る。「身体が余りに小さいので、『弁当殻が動きよる。』と言って笑われたりしました」という。小さな少年の精いっぱい働きぶりを大人たちは微笑ましく見ていたことと思う。

【夜】 宿舎に帰ってからは夕食の準備、ランプの掃除、人夫さんの使い走りで購入へ行っ
て買い物をしたりする。事務所で配膳されるのは「飯と茶」で副食品は全部個人々々で準備
しなくてはならなかった。その副食などを人夫さんに頼まれて買いに行くのである。

「芳川山事務所には購買部を設けてあり、必要な物資を大奈路等の店舗で仕入れて置いていた（岡本雄三氏談）。」ということである。この「購買」は配置図の「給品部」と思われる。

人夫さんの夕食が終わり風呂に入ってようやく利國さんの夕食となる。お腹も空き一日の疲れと眠気が一気にやってくる。ご飯を頬張る、食べながら睡魔におそわれて頭がのけぞ



芳川山献木事務所と
人夫宿泊所の配置図

る、また起きてご飯を頬張る。利國さん曰く「飯の食い反りでした」とはなんとうまい言い回しであることか。そして翌日はまた、朝五時に留おばさん（かしきさん）に起こされ、一日が始まるのである。

一週間に一度、利國さんは自宅に副食を取りに帰った。人夫たちは副食を購買で買うが、利國さんは自宅から持っていったのだ。その副食は、漬物、いりこ、味噌、塩辛い鯖など。夕方に自宅に帰りそれらを持って翌日の午前 3 時に起床し松明の明かりをたよりに大奈路の自宅から翌朝 5 時の仕事に間に合うように事務所に帰ってくるのである。

こういう日々、利國さんは「この間に一度も家に帰って遊びたいとか、朝寝をしたいとか、また山で寂しくて泣くとか、全然一度もなかった」と振り返る。へこたれている暇はなかったのだ。気を抜く暇も。「勉強はしなかった、出来なかった」という言葉が心に沁みる。

ある日、いつものように自分の体より大きい空弁当箱を担いでの山道、利國さんは途中の「とがたび」と言う小さな滝壺で太さ 30 センチ余りアメゴが 10 匹くらい泳いでいるのを見つける。そして「毎日帰るときには五、六分くらい眺めて帰った」という。手記にたった一度登場する無邪気な少年のささやかな道草だ。厳しい仕事の中に童心を満たすものがあったことにホッとする。なんといっても今なら中学一年生の年齢なのだ。

働きながら学び育っていく 利國さんが仕事の仕方を身につけていくやり方、それは先輩の仕事のやり方から自ら習得していくことだ。あれこれ（山仕事の）道具を取ってこい持って来いと言われ、その使い方にも色々あるのを見て覚えていくのである。やれることは実際に手伝い、その結果出来るようになっていく。

失敗もまた学びであった。あるときは蔓を採りに行き、木に登り蔓を切り落としたまではよいが自らの降り道を断ってしまう。一緒にいた叔父が助けてくれ事なきを得た利國少年は「このとき、蔓一本採っても、一から先輩たちのすることを見よう見まねで覚えねばと思った」と気持ちを新たにす。以降、「鋸、鉋、木の根本の切り方、倒す方向など、すべて動作を見て覚えた」。

日々のくらしも現代とは程遠い。ガスや電力が里山からの薪や炭にとって代わる前は、生活のあらゆる場面でそれなりの「技術」が必要な日々だった。旧大正町の家庭に電力が供給され始めるのは昭和 11 年から¹³⁾であり LP ガスはさらに後になる。手記に記された昭和 6 年ごろは子どもでも焚き付けや水仕事ができるのがあたりまえだった。

母が家にいないときは利國さんが農作業もする。「母の言いつけは春夏秋冬四季を通じてすべて違い、時期に応じた仕事」がある。「母からは私たちは『大木の下で小木が育つようなものであるから、人を見習え』とよく言われた」という。当時の山村で日頃からなじみの深い「山の木」に例えた母の言葉が利國さんの心に深く刻まれたに違いない。

当時のくらし、物価、賃金等 「利國氏の手記」で驚くのはその記憶力である。例えば物価。

「お米が大奈路で一升の金額が十五銭くらい（はがき一銭五厘、切手三銭、たばこバット七銭、散髪十五銭、地下足袋七十五銭、お酒一升七十五銭）だったそうですが、芳川の現場では一升二十一銭だったと思います」とある。シャツを仕立てると一枚四十銭であった。

当時の金額を現在の物価に換算すると、とよく言われるがそれは単純ではないと思う。どのような物資がどれくらい流通していたのか、何が自給でき、何を購入せねばならなかったのか。ひとまず目安としては3000～3500¹⁴⁾ 掛けると現在の物価と比較できるのではないかなと思う。地下足袋¹⁵⁾ は現在の価格にして2,500円ほど。なるほどと思う金額だ。ただ現在はその多くは低賃金の外国で生産されているのだが。それにしても散髪15銭は安すぎるようにも思う。手記を読みながら興味は尽きない。

仕事が決まった利國少年はまず作業着を集落の仕立て屋さんに縫ってもらわねばならなかった。つい今の大型専門店にあふれる作業着を思い浮かべるがそんなものは当時はないのである。大人も仕立ててもらったのだろうか。大人には既製品があって小柄な少年のものだから仕立てねばならなかったのだろうか。ここのところはお存じの方にぜひ教えてもらいたいものだ。

そうこうして整えたのは「股引（足首に小ハゼ一枚が付いた通称バッチ）二本とシャツ二枚。地下足袋。小さな道具（鋏、輪切り鋸）」。利國少年は仕立ておろしの作業服と新しい道具を持って意気揚々と「部落の先輩たちと現場へ行った」に違いない。

物価がこのような時代、利國さんの賃金はどのくらいだったのだろう。「朝五時起床で、午後七時頃まで走り使いをして一日の賃金四十三銭」だった。今で言うところの労働条件は「およそ二年間の初仕事の期間、日曜祭日も休みなし。お正月三が日、部落のお祭り、お盆休み三日間の一年間に十日くらいだった」。

1ヶ月30日として1ヶ月の賃金は「一日賃金 四十三銭×三十日＝十二円九十銭」。

そこから現地で支給される食事代「一日食費 お米六合（十二銭六厘）×三十日＝三円七十八銭」を差し引いて残りは「九円十二銭」。少年はこのお金（九円前後）をそのまま母に渡すのである。やがて賃金は「六ヶ月くらいして四十五銭になった」「昭和七年の流材（筏流し）のときは、七十五銭くらい」というように次第に上がっていった。少年は日に日に一人前の働き手に成長していき「年が経ち、月日が経つうちに一円五銭」になる。

当時の大人の人夫さんの賃金はこうである。一日の労働時間は「何時（から何時と勤務時間は定められておらず）、夜明けから日暮れまでが一人役」。賃金は上賃が一円十銭前後だった。「昭和初期の頃の地元の先輩たちの賃金は、腕前、また目先の見える人で、一日一円二十銭が最高額でした」という。この「最高額 一日一円二十銭」については『大正町誌』の小野川精馬氏の思い出の中に「右の事業（献木事業）に対しての日数は約丸一ヶ年を要し使用人夫、毎日四十人を使役、賃金は当時普通賃金九十銭から一円位であったが、この事業には壱人役壱円二拾銭を出した」とある。「献木」伐採搬出作業の困難さ、いかに技術が必要なものだったかがここにも表れているように思う。

当時の食事 食事は一日四回。大人はその四回で一人当たり八合のご飯を食べた。少年である利國さんも一回に一合五勺、四回で一日六合食べたという。副食は毎日味噌、いりこ、漬け物、たまに辛い塩鯖というものだった。

そういう質素な食事に彩を添えるのが山や川の恵みである。昭和7年の春先、山に山椒や

イタドリ、木の芽が出る時期。利國さんは先輩たちから食事の時刻に茶沸かし場に「河原の窪みのある石を焼いちょけよ。」と言われる。午前10時、午後2時の食事のとき「弁当をあげてみんなのおかずを、味噌も漬け物も何もかも焼き石の上に載せて、お茶を少しかけて、石の熱によって焼けた味噌を山椒などに付けて、みんなが車座になって食事をした」。読んだだけでも焼けた石から立ち上る山菜や味噌の香りがしてくる。「今思い出しても楽しかった」と後年の利國さんは記す。

川下りの箇所では、堰に集まった鮎を焼いて食べる場面も描かれる。山も川も豊かであったが、日々の食事はほんとうに質素だった。今の日本の食は・・と書きかけたが止めておこう。手記はここでも私たちに問いかけてくるのである。

お兄さんの丑馬さんと家の建て替えのこと 兄の丑馬さん（尋常小学校卒業年から見て二歳年上であるようだ）は小学校卒業後は田野々青年学校に通学した。昭和5年には幡多郡中村町東下町、堅田ブリキ店に弟子入りしている。

丑馬さんが中村に出発する日、利國さんは自転車に二人乗りで（大奈路から）田野々の熊野神社の下まで行き、そこの渡し場で兄を見送った。向こう岸に渡った兄は徒歩で杓子峠を越えて中村へ行った。昔の往来は旧街道、山越えの道だった。

この丑馬さんが家の建て替えをするエピソードはたいへん興味深い。丑馬さんが立替を決心したのは年齢にして13、4歳、昭和3年ごろという。自分の持ち山に生えている、杉、松などの家道具（建築用材）になる木を伐り乾燥にかける。小学生の利國さんもその手伝いをしている。いよいよ建て替えるのは昭和7年になってからである。

家は持山の材で地元の大工さんと建てる。それが山村のやり方だったとはいえ、丑馬さんの決心とそれを実行していく姿はずば抜けている。「代金は四十五円だったと聞いたように思います。当時五円の金子を他人から借りるとしたら、保証人が二人必要でした」という金策、その他の手配をどうしたものか。利國さんご自身はその間の細かい事情は分からないらしい。ただ、この時の兄の行動力を書き残しておきたいという気持ちは痛いほど伝わってくる。「この時代に兄は、小さい家とはいえ建て替える考えを、年齢もいかないうち小学校を卒業したばかりで、材料の段取りから、よくやったと思うのです」。

（2）献木伐採の現地の様子

献木については『高知大教会史』にほぼ網羅されているといつてよいので、全容を知りたい方はそちらを見ていただくとよい。その中には現地資料として『大正町誌』と「利國氏の手記」も引用されている。

『大正町誌』は現場の工程、責任を一身に背負った小野川精馬氏の思い出で、「難事業を可能にした技術や工夫」について語られている。「利國氏の手記」は生き生きと現場の様子が描写されている。

桧材の切り出しの場面¹⁶⁾ 『高知大教会史』と重複するが、そのダイナミックな描写はこうである。伐採は「桧さん2名と根本を掘る人3名、の5名で二日くらいかかった」。桧さんの指示で倒す方向を定める。材の胴体を傷めないように倒す方の側の枝は胴体のクッシ



芳川山天 32 号（天然桧）の伐採①



芳川山天 32 号（天然桧）の伐採②

ョンになるよう残しておく。

「いよいよ倒すときには、柚さんは遣り声と言葉を言う。これは昔から山の神様と、また、人が下から上ってくるかも分からないので、この声を三回言うてから倒し始める。『この木は左チョウナー！オオナガセに行くぞー！』と、三回大声で必ず柚さんが言いました。」

大木が倒れるその時、利國氏はこう感じた『高知大教会史』にある。「樹齢三百年、樹高三十メートルあるいはそれを超えるような、王者のごとき大木が山をゆるがして倒れる姿は荘厳で、子供心にも感動というか、涙が出ました」。



カグラ巻きの様子

カグラ巻き 「カグラ巻き」¹⁷⁾ とは小野川精馬氏の発案により芳川山で取り入れた搬出技術である。小野川精馬氏によれば「当時営林署では伐採の材木の間切りをした木材を谷合に落とし込み、それを軌道まで揚げるのに才当り五十五銭を要していたが、カグラで巻き揚げる方法を利用して才当り十七、八銭で揚げて居るのでこの実状からみても『カグラ巻き』が一番である」と経済的省力的に優れた方法であると述べる。

「カグラ巻き」は力を分散させるのでより小さな人力で動かすことができる。利國氏は「山の仕事は荒仕事で、九分九厘までは男の仕事ですが、現場では柚人や人夫の奥さんたちも働いておられて、このかぐら巻きは主に婦人さん方の持ち場でした（『高知大教会史』131頁）」と述べる。「カグラ巻き」は経済的省力的な技術であったと同時に女性でできる力仕事を生み出し少年の目はその変化を捉えたのだ。

軌道敷設による材の搬出 芳川山には軌道が敷かれていなかったなので、この軌道敷設自体が大仕事であった。軌道の起点は「屋鋪ノ駄場」より 4 キロ¹⁸⁾ 余り奥にある「栃木ノ駄場」

である。軌道のレールは地元にないの
で高知市や県西部から借りてきたも
のであるが 2.5 k m 分しかない。それ
を前方へ前方へと送り出して搬出し
たという。そのレールを運ぶ作業自体
たいへんなものであった。レールはい
ったん営林署の機関車で中津川の成
川事業所まで揚げてきて、その後は一
人一人が肩に担いで ¹⁹⁾ 成川から芳川
へ山越えて運んできたのである。利
國氏は軌道を組み立てる時の技術者



芳川山軌道敷設の作業

たちすばらしい技も書きとめている。トロッコは「大工さんの上岡政藤さんが組み立てして、
連結トロッコにした。二台へ一本の材を積み込んで、曲がりカーブをスムーズに出すために
二台にしたのだ」。

軌道のレールは専門の技術者が敷設する「中津川の林盛枝さんこの人は、曲線の箇所を見
てきて、シンクロ（レールを曲げる機械）を掛けて、人夫さんに『持って行って合わせて見
よ。』と言うと、二本の線がピッタリ合うほどの名人でした」。搬出もまた伐採と同様に膨大



芳川山トロッコ軌道と中継土場

起点・栃木ノ駄場から終点・川ノ内口（吉川口）まで

な人力と名人たちの技があってできた大事業であった。

「栃木ノ駄場」を起点としてたトロッコ軌道の中継所は五か所。

第一回目の中継土場：「屋舗ノ駄場」の人夫小屋の前の河原

第二回目の中継土場：国有林恵官者山の下流域、芳川字サビコ

第三回目の中継土場：芳川の部落の二股のところと少し下がったお茶堂の中程の広場

第四回目の中継土場：川ノ内の小崎の下側で、歩道の向かいに田んぼがあるところの広場

終点：川ノ内口。ここで四万十川に元木と末木とで筏にして、下田港へと出した。

木材輸送の転換点—昭和 8 年トラック輸送へー 『大正町史』によるとトラック運送が本格的になるのが昭和 8 年とされる。「献木」はちょうどその転換点の出来事でもあった。

「利國氏の手記」は当時の川流しの様子をこう語る。

「昭和八年十月頃、四万十川を毎年営林署事業所の材木、中津川、久良川、高取事業所の材を中村町下田まで、バラ流しにしておりました。」

「大正村下道一キロ半くらい奥の久良川事業所の材を、人夫さんが四万十川の川入れ材とし、浅瀬の箇所は、その材木で堰き止めて、材を浮き上がらせるようにしては、次々と流した。人夫さんは百人くらいの人々で、先盤、中盤、後盤の三組に分かれて立ち返して、堰出しといって、順次流した。」

川流しの終わるときが訪れる。手記には「私も、八年十月頃、大正村での流材も今年で最後の川流しとなるとのことで、トビロと二十四インチの赤塗りの自転車を買って貰って、小さい身体で皆さんに付いて行きました」とある。このときも利國氏の仕事は「茶沸かし」である。

「轟の瀬、二股乗り、四手三島瀬、四手上側の大在の瀬、十川上側の小貝の瀬、茶壺の瀬」が四万十川の六ヶ所の荒瀬（川流しの難所）である。川登りの七・八間と言う堰も難所であったと利國氏は記憶する。人夫たちが乗り切っていった「難所」は川下りの終わりとともに歴史の中に遠ざかり、四万十川が楽しむ川になった今はカヌーの難所としてその名を聞くことになる。



川流し

また、馬車による運送については「大正、窪川には馬車引き、荷車引きが居り、中上佐町久礼まで馬車に積んで材木を出した。」、その経路は「大奈路を朝三時頃出発して、日帰りするのに（帰りは）午後の九時、十時頃になると聞きました。」と記述する。「献木」中津川材はこの馬車により、窪川町内を苦心の上通過し久礼坂を通過中土佐町久礼港まで運ばれている。これもまた馬車運送がトラックにとって代わられる直前のことと思えば感慨深い。

現四万十市の旧中村市はそのころは「中村町」。川流しの人夫たちは中村町の鉄橋の元にあった宿屋に泊まった。最後の川流しの時、利國少年は「最後の日の前日に入野の松原へ行くことになって、皆さんと一緒に行了きました」と記す。そのとき、少年は生まれて初めて「海と言うところを」見たという。

こうして「献木」伐採の現場に始まり「大正の木材輸送の転換点」を記した「利國氏の手記」は、利國氏が初仕事の後、県内外で山の仕事に励む様子のところで終わっている。芳川山の奥で献木伐採の初めの斧が振り下ろされた時から 90 年。その間にどれほど多くの歴史のできごとがあったかは今更言うまでもない。その長さを思いつつ手記の紹介を終えたい。

あとがき

13 歳の少年が屈強の作業員や手練れの杣人一仰ぎ見る先輩たち一に立ち混じって骨身を惜しまず働き技を身につけ、一人前をめざす。それは当時さして珍しくないことであった。またそういう思い出を書き残した人も他にもいるかもしれない。しかし利國少年のスタートラインが「献木」事業であったことがこの貴重な記録を今に残すことになった。

昭和 6 年 5 月、疲労困憊した献木探索者たちが巨木発見に感激と安堵の大声をあげたと聞く芳川山。その巨木の当時の画像を見た。現在の林業者が夢見る 100 年の森、200 年の森はまさにこれではないかという、明るく様々な樹種が複層をなす山の姿であった。90 年前のふるさとの森を懐かしむ現代の杣人たちの気持ちは、実は深いところでこれから 100 年後の将来の森に繋がっているのではないか。

一方、「利國氏の手記」に登場する人々はほぼ故人となられ、人々の生前の姿を記憶する者も高齢者になりつつある。当時あどけなさの残る 13 歳、現場では最年少だった利國氏が今ご存命ならば 103 歳、といえは時の長さを実感していただけるのではないだろうか。おそらく今を逃すとこの記録は急速に体温を失っていったことだろう。

「献木」の新たな記録たちが「今」という時を逃さずに立ち現れてくれた。

それは記録保存をされた天理教高知大教会、また歴史に思いをはせた旧大正町現地の林業者の方々、たくさんの関係者の方々の厚意と熱意があってこそ実現したことである。

皆様への感謝を込めて、ここに紹介できるのは私の仕合せである。



芳川山
探索隊が見つけた桧とその森

表 1 旧大正町及び折合の献木伐採から輸送の経緯

西暦	昭和	月	日		大教会史 該当頁
1930	5年	7月	26日	天理教本部直属教会会長会議で「教祖殿改修」と「神殿増築」の発表が行われる。	
1931	6年	2月下旬		第一次探索隊結成	18
		4月	17日	大正営林署と売買契約締結（於：中津川作業所）	36
			20日	大正営林署森林主事郷正美氏より芳川山の紹介	40
			30日	高知営林局長あて 払下げ願書を出す	42
		5月	10日	芳川山にて巨木確認（天二十八号特大）	54
		6月	26日	本部において昭和普請の起工式	63
		8月	15日	大正営林署吉枝所長以下署員2名で芳川山の实地毎木検査開始 最終的に予定本数40本全部の払下げ可能となる	88
			27日	大正営林署と調印契約完了	93
		9月	27日	9月下旬から「屋鋪ノ駄馬」に献木事務所および作業員小屋を建設開始 9月27日に芳川山伐採起工式 ここから撮影技師佐藤辰夫氏の16mmフィルム撮影が始まる	93
		12月	5日	天理教二代目真柱様、芳川村現地視察、用材検木 この時に別途選ばれた桧の古木は雛形かんろだいの用材として使われることになった	143
1932	7年	1月	3日	芳川山の40本の桧の伐採終了 1月初旬から高知市内で搬送用レールの借り入れについて調査開始	149
			28日	芳川山搬出用レール。高知市の業者から1.3km分、県西部において1.2km分を借りることになった（計2.5km分）	163
		2月		芳川山分の搬出用レールの搬送、敷設始まる 中津川（古宿を含む）の桧21本ほぼ伐採が終わる	198
		6月	17日	中津川（成川）材を中津川作業所の協力を得て搬出した 6月17日に芳川山の桧40本を江師までトラックにより運び終わる	189
		7月	6日	芳川山桧 川下り開始	192
			8日	芳川山桧下田港到着	193
			14日	下田港から大阪港にむけて出港	193
		10月	1日	中津川材が大奈路貯木場に出揃う 川水が少ないため陸送に切り替えることになる	208
		11月	1日	「第二回献木活動」（折合山桧材の追加献木）決定	228
		12月	17日	中津川材の馬車による輸送開始	209
			16日	折合の用材可否調査開始。最終的に7本が合格	237
1933	8年	1月	15日	折合の桧7本の買収申し込みうち5本が払下げ決定となる	241
		2月	9日	折合の桧5本の売買契約	241
			27日	折合の桧5本の伐採開始	244
		7月	18日	折合の桧5本の下田港を出港	290

【註】

- 1) 「昭和普請」では、教祖殿、御用場、南礼拝場の増改修が行われた。
- 2) 『天理教高知大教会史 第三巻』、『天理時報』第 4728 号（2021 年 11 月 17 日）、『私の思い出』（小野川利國・補筆岡本雄三氏）、天理教総本部南礼拝場及び高知献木の使用位置（天理教高知大教会提供）。『天理教高知大教会史 第三巻』は四万十町立図書館に寄贈していただいた。
- 3) 「天理教徒の献木（小野川精馬氏の思い出）」（大正町誌編纂委員会 1970『大正町誌』494～501 頁）。
- 4) 天理教二代管長中山正善。管長は当時の正式な代表者役職名である。
- 5) トーキーによる映画は昭和 5 年（1930）に日本で初めて上映されたばかりで、この頃はまだまだ普及していない。
- 6) 平成 7 年（1995）6 月から平成 8 年（1996）1 月にかけて岡本雄三氏がシナリオ作成から映像編集まで行って作成された。
- 7) 周辺住民の聞き取りから、大奈路橋のたもとにある喫茶店「やたて」ではないかと推察される。
- 8) 立教 179 年・平成 28 年（2016）に天理教高知大教会史料部が編纂し、同教会の歴史をまとめたもの。
- 9) 南礼拝場の御柱・天然桧 40 本のほか、小屋組用の母材などがすべて土佐材である。
- 10) 『四万十町地名辞典』＜<https://www.shimanto-chimei.com/>>に手記の全文を掲載している。
- 11) 「利國氏の手記」（岡本雄三氏書き起こし）には「小野川誠馬」と表記されている。
- 12) 集落の佐々木松次、佐竹常太宅を借りた。
- 13) 『大正町史 通史編』第四章 264 頁では、大奈路は「大正電機株式会社 第一期工事で点灯した地域」に入っている。
- 14) 「大卒初任給」及び「白米」の価格比較から筆者が算出したもの。
- 15) 昭和 4 年(1929)の『大阪時事新報』（神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫）に「一足 1 円 10 銭から 1 円 30 銭」という記載がある。
- 16) なお画像のキャプションにある「芳川山天〇〇号」とは高知大教会の探木班員が発見木の識別・整理のために記した番号である。
- 17) 小野川精馬氏は「芳川谷の川原をとりあげて木馬道を作り、木材を木馬に積んで挽き出す。その木馬の牽引方法にカグラ巻きを採用」した。ここにいる「カグラ巻き」とは「神楽棧（カグラサン）」のもととは漁業で浜に舟を引き寄せたり鯨の躯体を引き寄せたりするのに使われたとされる。長崎県五島市の文化資産として「カグラサン」跡が残されている。
- 18) 「利國の手記」6 頁には 4 km とあるが、軌道敷設にあたってのレール延長が 2.5 km であったことを考慮すれば、第 1 回目中继土場（屋舗ノ駄場）の上流 2.5 km 地点が「枅木の駄場」である可能性が高い。
- 19) なおレールの重さについては、『上山郷（昔の大正邑）のいろいろかいろ掻き暑めの記 下』394 頁の小松尾山のレール担ぎについての聞き語りの中に「レール 1 本の重さは九貫（およそ 33.75 kg）」「男は一本抱だき担ぐのでは軽すぎるが。しかし二本では重すぎる」とある。レールの長さは 4.5m～6.3m。